

ニューズレター 第90号・2011年7月

日本カナダ学会

発行人：杉本公彦 編集人：宮澤淳一・時田朋子

事務局：〒564-8511 大阪府吹田市岸部南 2-36-1 大阪学院大学流通科学部 杉本公彦研究室内
TEL:080-3868-1941・FAX:03-6368-3646 ・ <http://www.jacs.jp> ・ jacsogu@jacs.jp
(電話等の受付：水・金曜日・午前11時～午後4時) 郵便振替口座 00150-2-151600

日本とカナダの絆

杉本公彦

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、多くの方々が亡くなっておられます。自然の猛威には語る言葉もありません。衷心よりお悔やみ申し上げます。幸いにも会員で亡くなられた方はおられません、被害にあわれた会員はおられます。東北地方住民の方々の生活は、大地震、大津波、さらには福島第1原子力発電所の放射能汚染等により、想定外のきわめて困難で厳しい状況にあり、心からお見舞い申し上げます。

東日本大震災の影響は長期化が見込まれ、国民生活にも深刻な影響が出始めております。阪神・淡路大震災を経験している我々本部事務局では、この度の大震災から生じる様々な問題を真摯に受け止めて考えていく必要があると思っております。被災地の皆様への支援が迅速に行われるとともに、被災地の一刻も早い回復を祈念いたします。

ところで去る5月27日(金)カナダ大使館4階にてカナダ大使館現庁舎開館20周年記念式典とレセプションが開催されました。駐日カナダ特命全権大使・ジョナサン T. フリード氏の式典挨拶、高円宮妃殿下の挨拶および日本政府外務省次官の乾杯挨拶で式典が始まり、予定通りに進行しました。出席者は、高円宮妃殿下ほか約200名でありました。

この式典に出席させていただいた成果として大変うれしいことがありました。会場にてフリード大使から本年度年次大会で講演については、既にスケジュールに入れているとお言葉を直接いただいたことです。式典直前にお会いしたエリック・ピーターソン一等書記官からは、本学会要請に対する正式な回答を得ていなかったことから、大使のお言葉は驚きでもあり喜びでもありました。また我々日本カナダ学会執行部の将来構想でもある若手研究者育成に関して、カナダ大使館との協力体制についてどのようなお考えをお持ちかをお聞きしましたところ、好感触を得ました。それが昨年からはじまった杉本体制のもとでのその場かぎりの机上の空論に終わらせることなく、これまで関東地区が積み上げてきた成果を踏まえた若手研究者育成プログラムが実現できる基盤となればよいなど思っております。

このように日本とカナダの絆が今後もこれまで以上に深まり、パートナーとして互いに助け合いながら影響しあうことが望まれます。それにはこれまでのカナダ政府からのご援助のおかげであることは言うまでもありません。
(大阪学院大学)

JACS Newsletter No.90(July 2011)// 本号の内容◆日本とカナダの絆(巻頭言：杉本公彦)

●報告：『未完成』の未来と復興への祈り：東日本大震災とカナダの反応(高井由香理)/連邦下院総選挙雑感(田澤卓哉)/ICCS年次総会に臨んで(下村雄紀)/追悼・藤本陽子会員：藤本さんを偲んで(真田桂子)/藤本陽子先生の歩み(馬場広信)●リレー連載：私のカナダ講座 第6回：鹿児島大学法文学部(細川道久)●第36回年次研究大会：基調講演者イタリアのカナダ研究者ルカ・コディニョーラ教授のこと(竹中 豊)●事務局より●研究大会に向けて(杉本公彦) ● 編集後記

The Japanese Association for Canadian Studies / L' Association japonaise d'études canadiennes

〈 報告 〉

「未完成」の未来と復興への祈り

——東日本大震災とカナダの反応

高井 由香理

2011年3月25日モントリオールで東日本大震災復興と支援の特別コンサートが行われた。このチャリティ・コンサートは、モントリオール交響楽団音楽総監督を務める日系アメリカ人三世、ケント・ナガノ氏の日本のために何かしたいという強い希望がかなったものだった。曲目はフランツ・シューベルトの交響曲第8番「未完成」。曲目選択には、未来は「未完成」であり、惨事のなかにあっても希望を捨てないでほしい、というナガノ氏のメッセージがこめられていた。マエストロの指揮には、祖父母の祖国日本への祈りとともに被災した人々への連帯感と称賛の思いが溢れていたといえる。演奏はラジオ・カナダのスタジオからカナダ全土に向けて放送された (http://www.radiocanada.ca/emissions/une_heure_sur_terre/2010-2011/Reportage.asp?idDoc=143439)。

大震災からわずか2週間後に行われたコンサートの背景には、マエストロ・ナガノとモントリオール響にみる迅速で力強いイニシアティブがあったことに違いはない。しかし日本支援の点からみると、このコンサートは単独という意味では「特別」のものではなく、これと前後してカナダ各地を包み込むことになる支援と連帯のための数多くの企画のうち、おそらく最初の試みといえるものだった。震災後2ヵ月半の今日に至るまで、各コミュニティ、個人、企業や商工会、赤十字をはじめとした各種救済団体、そして州政府の主導による震災支援のための様々な寄付活動が繰り返されている。例えば草の根レベルでは、5月はじめトロントで13人のカナダ人アーティストが“To Japan with Love”と名づけたポスターのチャリティ展示会を開催。そこで発表されたジェームズ・ホワイト氏 (James White) の作品『日本を救え(Help Japan)』は、白地にひびのはいた赤い太陽を描き、打撃と苦痛を負った日本の姿を現していた (<http://tojapanwithlove.ca/artist-james-white/>)。さらに各地での救済慈善イベント (“*Ganbare Nippon!*

Beating the Drum for Earthquake Relief,” “Salsa for Japan” 等) が引きも切らない。トロント在住日系カナダ人の集いの場、同市日系文化会館が設けた基金 Japan Earthquake Relief Fund には、5月13日現在82万カナダドルを超える寄付が集められた。さらに、各州政府はそれぞれ25万ドルから500万ドルの救済寄付を行っている。世界のメディアがトップニュースで伝えた東日本の三重災害——大地震、津波、そして炉心溶融と放射線被曝——の報道が鳴りを潜めつつある現在でも、こうした支援活動は勢力を失う様子はない。

ところで、一過性の報道を超えたカナダ各紙の反応のうち、わたしが関心を引かれたものには大きく分けて3つある。まずひとつはカナダも同様の災害に見舞われる危険がある、と警鐘を鳴らすもの。大地震直後、この危険は特にBC州の太平洋岸で将来予測される大型地震に関するもの (“*Researchers look to Japan for clues to B.C.’s long overdue ‘big one,’*” *The Globe and Mail*, Mar 12, 2011; “*Next time it could be us,*” *The Globe and Mail*, Mar 15, 2011) が主流であったが、福島第一原発の事故を受けて、論点は原子力発電の危険性に関する議論も強まりつつある (“*Canadian nuclear plants to review safety,*” *The Globe and Mail*, Mar 22, 2011)。カナダでは、過疎地域に原発建設が行われてきた日本とは対照的に、人口最大州オンタリオに原発施設が集中している。全国で運転中の17基のうち16基が同州にあり、最大都市トロントからわずか1時間圏内に10基が稼働、さらにオンタリオ州の供給電力の半分以上は原子力に依存している。こうした事実には、同市に住むわたしも冷や汗が出る。折しもドイツでは、福島原発を巡る議論からバーデン・ヴュルテンベルク州議会選挙で連立与党が大敗北、その後メルケル首相が原発を含めたエネルギー政策の見直しを決定した(あるいはせざるを得なかった)。しかし、5月2日に行われたカナダ総選挙では、「発電政策は州案件」と主張し、原発政策を総選挙の争点とすることを回避した保守党ハーパー政権が(残念なことに) 多数派を獲得した。

メディアの2つ目の反応は、日本人の精神力への称賛だ。これはモントリオール響の特別コンサートの際に行われたインタビューでも繰り返

返し触れられた点でもある。同様の経験は個人的にもあった。震災の数日後、わたしの研究室をわざわざ訪れて、日本の家族への心遣いと被災地へのお見舞いの言葉を伝えてくれた同僚は、続けてこう語った。大惨事の混乱と破壊のなかでパニックにも暴動にも陥ることなく、配給待ちの列を作り、避難所で寝起きし、涙を流すときには報道カメラから顔を背ける日本の被災者の平静さと忍耐力は、世界でも類を見ないものであると。こうした威厳をもった行動は「日本が世界にお手本を示すものだ」（"Le Japon nous montre une leçon."）と。オタワ紙が「極度のストイシズム」（"Why quakes leave the Japanese unshakable," *The Ottawa Citizen*, Mar 15, 2011, Ben MacIntyre, *The Times*, London）と呼んだこの忍耐力の背景には、日本で幼いころから教えこまれる我慢（"gaman"）と頑張れの精神、さらに災害時に備えての準備と訓練も（その限界はあるものの）関係しているといえるだろう。

3つ目は、「フクシマ50」と名づけられた福島原発の復旧作業員に関する報道だ。4月初すでにその数が700名を超えた復旧の戦士たちは、カナダを含む海外の主流メディアやソーシャル・メディアで英雄視されているが、一方日本では同様の称賛を受けているわけではないことを『バンクーバー・サン』紙は伝えている（"Japan's Fukushima heroes' battle nuclear crisis in anonymity," *The Vancouver Sun*, Apr 2, 2011）。さらにその要因について、同紙は社会学者宮島孝氏のことばを引用しつつ、日本では称賛は基本的に集団に与えられるものであり、しかもその集団が最終的に成功を収めた際に限られる傾向をあげている。さらに東京電力の責任問題が一層可燃するなか、東電の原発施設の復旧作業にあたる人々への支援に関する報道も日本側のメディアが控える傾向があるのではないか、といった点も指摘されている。

惨事の規模はあまりに大きく、失われた日常の再生に長い時間が必要とされることを思うと、「一日も早い復興」という表現を使うことにさえ躊躇を感じざるを得ない。しかし、被災地の方々への支援と励まし、そして打撃に忍ぶ日本経済と社会全体の建て直しを祈る気持ちは、カナダの多くの人々に共通するものだ。未来は未完成、しかし可能性は無限

というナガノ氏の思いに日本の家族、そして数多くの友人を思うわたしからの願いを重ね、心からお見舞いのことばを送りたい。（ヨーク大学）

* * *

連邦下院総選挙雑感

田澤 卓哉

2011年5月2日、連邦議会下院総選挙が行われた。結果は、ハーパー首相率いる保守党が308議席中166議席を獲得し（議会解散時143議席）、カナダで2004年以降続いていた少数与党政権の流れを脱して安定多数政権を実現した。新民主党（NDP）はレイトン党首の高い人気等を背景にとくにケベック州での高い支持を得て、36議席から103議席に大躍進を遂げて野党第一党の座に就いた一方で、自由党は77議席から34議席に大きく勢力を減じ、イグナティエフ党首自身も落選するという惨敗を喫した。また、結党以来ケベック州で強さを誇っていたブロック・ケベコワ（BQ）もデュセップ党首落選の憂き目に遭い、獲得議席わずか4議席という壊滅的な結果に終わり、議会における公認政党の地位をも失うこととなった。なお、緑の党はメイ党首が当選し、同党にとり初の選挙での議席獲得となった。

総じて、選挙公示直後には「結局解散時と同じ結果になるだろう」と報じられたりしたもの、結果としては、何よりもNDPの大躍進に象徴されるように、「カナダ政治における地殻変動」と称されるほどの変化をもたらされた選挙となったと言える。

今回総選挙に至ったそもそものきっかけは、3月末に自由党が提出し、野党3党の賛成を得て可決された政府不信任動議であった。政府の諸施策に係るコストについて政府が議会に対する十分に情報開示しないことが議会に対する侮辱に相当するとして、自由党が政府に不信任を突きつけたのだった。折しも3月は次年度予算案の提出が重なり、その予算案に野党3党が揃って不支持を表明したことで、総選挙に向かうモメンタムは決定づけられ、結果、議会は解散し、総選挙が公示された。

選挙期間中の各党の戦略を見ていくと、保守党は野党による連立政権構想を（自由党がその可能性を否定した後も）牽制しつつ、依然脆弱な経済を乗り切るためには同党による安定多数政権が必要と訴え、均衡財政に向けての取り組

みの加速、国防・治安の強化、低課税策等を軸にした。自由党は、保守党が掲げる右派的な政策と対比する形で教育支援・福祉の充実等を中心とする社会政策を前面に出しつつ、政権担当能力を有する存在であることを強く主張。しかし、イグナチエフ党首の個人的な不人気に加え、総選挙実施の引き金となった政府の政治倫理の面で保守党を攻めきれず、苦しい戦いが続いた。それに対し、NDPは低中所得層に的を絞った伝統的な諸政策のみならず、これまで同党があまり触れてこなかった犯罪対策等の施策も提示し、左派色一辺倒のイメージを和らげるキャンペーンを展開した。BQは、ケベック州における安定した支持を背景に、これまでの選挙同様、BQこそが同州の利益を擁護する存在であると主張することで手堅く支持を維持すると見られた。

選挙期間中に話題となった争点としては、長銃器登録制度の是非、政党助成金のあり方、F35戦闘機調達の是非、治安強化及び厳罰化を目指した刑法改正、法人税率、医療制度改革、上院改革、昨年のG8/G20サミットに係る不正支出の疑惑などが挙げられるが、いずれについても選挙期間を通じて大いに議論が深められることはなく、主にメディアの注目は各党がいつに選挙戦を展開するかという戦略の面に注がれる傾向が強かったと言える。

選挙の流れが明らかに大きく変わったのは選挙戦半ばの党首討論後であった。英語と仏語それぞれで行われた討論では、1984年の党首討論でマルルーニー進歩保守党党首がターナー首相に浴びせたような「ノックアウトパンチ」に匹敵する決定打はいずれの党首からも出なかったものの、ハーパー首相が野党からの種々の批判に耐え、守りに徹して乗り切った以外では、レイトンNDP党首が持ち前の雄弁で他政党の党首と互角かそれ以上に善戦したことで、党首討論を転機に支持率を上昇傾向へと転化させるきっかけとなった。支持増大の要因としては、特にケベックにおいては既存の伝統的な2政党(保守党・自由党)に対するこれまでの失望感とBQへの倦怠感が相まって変化を求める気運が高まったこと、ケベックの穏健なナショナリストへのアピールを巧みに展開したこと、ケベック州の有権者にはNDPの社会民主主義的な政策を受け入れる素地があったこと、選挙戦終盤に入りNDPは他党批判を最小限にとどめ

つ自党の政策を積極的にアピールする姿が好印象につながったことが挙げられる。

かくして、ケベック州以外にもNDP支持の勢いが波及し、党首討論後の選挙戦後半ではNDPが支持率調査で自由党を追い越したのみならず、保守党に迫る勢いを見せ、最終的にはケベック州での59議席を含む103議席獲得という結果につながるようになった。

保守党が念願の過半数を獲得した理由もさまざまに分析されるが、手堅く財政再建指向の政策を提示できたこと、これまで自由党支持と目されていたエスニックグループからの集票に成功したこと、NDPの伸張による左派政党間の票割れに助けられ、とくにオンタリオ州で大幅な議席増を達成できた点などが挙げられるだろう。

今回の選挙により、今後4年間は、常に政府打倒・総選挙実施の可能性がつきまとっていた少数与党政権時代とは異なる政治が進められることになる。より安定した議会運営が見込まれる中、ハーパー政権はこれまで野党に実現を阻まれていた法案を思いのままに進めていくものと思われるが、保守党は「隠された思惑 (hidden agenda)」を有しているとの批判が一部にある中、世論の動向を注視しながら右派的な政策をどこまで追求するのが注目される。他方、ハーパー保守党が過半数を確保した今、議会における影響力という点では野党の存在感が相対的に小さくなることは避けられない“Orange Crush”と称される躍進を遂げたNDPは、ケベック州で他の政党を「粉碎」する程の結果を残した一方、同州の有権者を失望させず、NDPへの「惚れ込み」を継続できるか否かがまさに今後の課題となるだろう。大幅な勢力減となった自由党にとっては党の拠って立つ基盤を今一度問い直すことが最優先課題となる。また、BQは党の存続そのものが問われている。各党の盛衰から、「ブレイクスルー (breakthrough) とブレイクダウン (breakdown)」と評された今回の選挙。果たして保守党が21世紀の“natural governing party”となるのか、今後の展開を注視したい。

(※本稿に示された見解は筆者個人のものであり、外務省の意見を代表するものではありません。)

(在カナダ日本国大使館)

* * *

ICCS 年次総会に臨んで

下村 雄紀

2011 年度国際カナダ研究協議会 (ICCS) の年次総会は、5月27日(金)と28日(土)の2日間にわたって、各国カナダ学会の代表(27正規団体と5准団体)が参加して、オタワのカナダ外務貿易省内(DFAIT)で開催されました。それに先立つ5月26日(木)に、協議会と外務貿易省の共催で、Understanding Canada Forum が開かれました。フォーラムは、午前の部ではDFAITを中心に調査・評価したUnderstanding Canada Programに関する集計結果の発表とその後の討議が主な構成でした。午後には代表が3組に分かれて、それぞれのトピック(① Complexity of the Program, ② Relève and partnerships, ③ External elements affecting the program)に関する活発な意見交換が行われました。JACSは、他の学会代表とともに②に参加し、学会活動の現状、地域のカナダ関連団体との交流、out-reachとしてのPANCSおよびENCs、若手研究者育成に関する見通しと問題について発言致しました。会合後は、ICCSの創設30周年記念のレセプションが催され、在中国カナダ大使館のMs. Wang Li、St. Lawrence大学のカナダ学研究所長のMr. Robert Thacker、1977年に創設のドイツ語圏カナダ学会の創設メンバーであり、ノーディックカナダ学会(NACS)でも活動してきたMr. Keith Battarbeeが、カナダ学促進に対する貢献が認められて表彰されました。

翌日の総会での焦点は、各国学会における会員の減少が現実化しており、(1)情報の普及(dissemination of information)、(2)研究者の若返り化(rejuvenation)が問題として取り上げられました。ICCSとしての対策は、研究助成とsocial mediaの活用が効果的な手法として推奨されました。そのために、ICCSの新しいウェブサイト(www.ICCS-ciec.ca)は、若い研究者の間で利用頻度の高いツイッターやフェイスブックとも連携できるようにリニューアルされたものになっております。

もうひとつの重要課題は、オタワ大学およびカールトン大学との共催で開催予定の2012年度ICCS Biennial Conference についてでした。開催日は、2012年5月22~24日で、テーマは“Cultural Challenges of Migration in Canada”です。JACSでは既にサイトに

掲載済みであり、会員の方々にはアクセスしていただいていると思いますが、締め切り日が本年7月10日であることから、役員各位へのお知らせと会長および副会長に加えて、専門に近い役員にご相談して、幾人かの研究者には個別にアプローチさせて頂きました。JACSからの参加を期待しております。

カナダのカナダ学会がICCSを去って、4年ほどが経過したが、今回研究者による新しいネットワーク(CSN: the Canadian Studies Network)が創設され、ICCSの准会員として申請がありました。プレゼンテーションの後、正会員のみで審議が行われ、全会一致でこれを承認しました。このことは、いったん途切れていたカナダの研究者との交流が再開されることとなり、JACSにとっても有意義な進展と言えるでしょう。

本年度は会長交代年であり、会長のKlaus-Dieter Ertler氏がpast presidentに退き、Patrick James氏(ACSUS)が新会長に着任しました。また、Stewart Gill氏(ACSANZ)およびSuzan Hodgett氏(BACS)が会計と書記長としてそれぞれ再選されました。

また、JACSとして名誉なことは、前副会長の細川道久会員の論文がICCS 30周年記念論集、*Canadiana, Canadian Studies: State of the Art*に掲載されました。論文タイトルは、“Canada’s Long Path to “Decolonization”: Empire Day as a Case Study”です。本部用として1冊保存してありますので、ご利用ください。

その他のプログラムなどは、総会でご案内したいと思いますが、JACS会員によるICCSプログラムへの利用者が激減している現状に鑑みて、既存の研究助成など会員の皆様のより一層のご利用頂き、日本に於けるカナダ研究の発展の一助として頂ければと願っております。(神戸国際大学)

* * *

<追悼・藤本陽子会員>

本会で理事を務められていた藤本陽子会員(早稲田大学)が、2011年5月1日に52歳で急逝されました。会員2名の追悼文を頂戴しました。ご冥福をお祈り申し上げます。

*

藤本さんを偲んで

真田 桂子

藤本さん、貴女が亡くなってから、大気は乾いて、空の色は褪せて見えるようになりました。私

のなかで、世界は確実に変質して感じられるようになりました。

藤本さんを偲ぶこの文章を、感情の吐露なしに書くことができないことを、どうかお許し願いたい。藤本さんを失ったことは、日本のカナダ研究界全体にとって大きな損失であることは誰しもが認めることであろう。私自身、藤本さんのカナダ研究全般に及ぶその大きな牽引力に恩恵を受けてきたものの一人である。しかしその業績を称える作業については、おそらくもっと適任の方々がおられることと思う。私がここで献じる拙い文章では、公私ともに親しくさせていただいた同年代の友人の立場から、闘病しながらひたむきに仕事に打ち込み生き抜いた藤本さんの姿を、いささかなりとも浮き彫りにできればと思う。

藤本さんと初めて会ったのは、もう20数年前の、新潟大学で開かれたカナダ学会の会場であったと思う。その折には親しくお話しする機会もなかったが、私が2度目のカナダ留学を終えて帰国し就職した90年代半ば頃からは、日本カナダ学会や日本カナダ文学会で頻繁にお会いし、藤本さんのカナダ文学のみならず、英語圏文学、ポストコロニアル文学、多文化主義研究など、幅広い領域にまたがる最前線を行く該博な知識と、緻密で論理的な分析力にぐいぐいと引き込まれていった。藤本さんの存在は、仏語圏を専門とする私にとっても、カナダ研究という大きな領野を照らす灯台であり、最前線の情報をキャッチしてくれる優れたアンテナのように感じられた。しかし、とりわけ藤本さんの、冷静沈着な表面に隠された温かみと責任感に溢れた人となりをよく知るきっかけとなったのは、彩流社が企画した翻訳のシリーズ「カナダの文学」で、編集委員として一緒に仕事をする機会に恵まれてからであった。私たちは翻訳の愉しみや悩みを分かち合い、励まし合った。諸般の事情により出版が遅れたシリーズ中の英語圏カナダ短篇集の校閲作業を藤本さんは亡くなる直前まで大切に手掛けていた。

1998年、藤本さんの病気が発覚し最初の手術を受けるために入院することになったのも、「カナダの文学」の翻訳が進行していたさ中であつた。母校、早稲田大学に戻り新天地で研究、教育に情熱を傾け、M・オンダーチェの『家族を駆け抜けて』を訳し終え上梓した直後で、まさにこれからという時であつた。藤本さんと私は、東京と京都で頻繁に会う

ことはままならなかったが、しばしば電話で連絡を取り合っていた。彼女の体調不良の原因が懼れていた病で、しかもかなり進んでいることが明らかになると告げられたのも電話であつた。二人とも電話口ですすり泣いた。私は、彼女にも自分にも「治る、絶対に治るから」と言い聞かせ、その後、「病に立ち向かえ！貴女の人生はこれから輝きだすところなのだから！」とファックスを送った。手術は成功し、数か月後、藤本さんは復帰を果たした。

それから藤本さんは、末期に近い状態で手術を受けた患者とは思えぬほど、精力的に仕事に打ち込み活躍をされていった。しかし、その裏では壮絶とも言える病との闘いが続いていた。定期的に繰り返されていた投薬治療と副作用との闘い。持ち前の抜群の情報収集能力で医者も舌を巻くほど最前線の治療や薬について調べ上げ、自ら治療に積極的に関わっていった。「医者から、厄介な患者だと思われているの」と言って笑っていた。文字通り強靱な精神力で病に立ち向かっていった。日本で承認されていない薬を試すために、海外の病院にまで出向き治療を受けていた。

過酷な治療にも冷静に、毅然と立ち向かい、颯爽と仕事をこなす藤本さんの姿を見ると、病が恐れをなして退散するのではと思うほどだった。一方で、私たちはよくいろいろな話題について語り合った。藤本さんの研究者としての有能さは、日常の様々なトピックにも発揮され、文学作品の分析から芸術鑑賞、身近なささいな出来事への分析にいたるまで、一級の審美眼と分析力で、彼女との会話は汲めどもつきぬ楽しさに満ちていた。また、海外出張や旅行先でも合流しグルメや観光を楽しんだ。大きな病を抱えながらも、藤本さんはいつも前向きな好奇心を持ち続け、人生を謳歌しようとしていた。

しかし残念ながら、2004年、イギリスでの国外研修の終盤に再発し、帰国後手術を受ける。このときも手術は成功し、病を撥ね退け、藤本さんは復帰を果たした。けれどもこの頃から、藤本さんは確実に迫っている「死」を意識しながら、生と死を見つめて生きていた。虚空を見つめながら「もう長くはないかもしれない」とポツリとつぶやき、胸を突かれる思いをすることもあつた。私はただただ祈るばかりであつた。しかし、きっと測り知れぬ葛藤を経て、人間として、女性として様々なことを胸に畳み込み、藤本さんは前向き

に生き抜こうとする姿勢を貫き通した。2006年早稲田大学で開催された日本カナダ学会では実行委員長の大役をこなし、大学では教育に情熱を燃やし弟子を育て、イギリスの大学での博士号取得に向けて精力的に研究を続けていた。死の一週間前の最後の電話にいたるまで、藤本さんとの会話からは、何事も大きな心で受けとめ、まわりの人々を思いやる慈愛に満ちた澄んだ気持ちが伝わってきた。自分の病のことよりこちらの体調を気遣ってくれた。

2011年5月1日、藤本さんは逝去された。その前日体調を崩し自ら救急車を呼んだ。入院する数日前まで授業をされて、病院に入院する際には、パソコンと研究資料も持ち込んでいたとのことだった。そしてその晩、お母様に見守られ眠るように逝かれた。誰にも真似のできないようなあつぱれな最期であった。

藤本さん、本当に寂しい、寂しいです。私は今もときどき貴女のことを想って泣いています。

しかし、藤本さんが孤独のなかで生き抜き、そのなかで沢山のひとと繋がって恩恵を与えたように、人はみな孤独のなかで生きるしかないのだ。

藤本さん、本当に有難うございました。貴女に出会い、貴女という友人を持たれたことを私は心から誇りに思っています。これからは病から解放され、思う存分やりたいことをなさってください。そして空高くひとときわ輝く星になって、どうか私たちを見守ってください。藤本さんの凛とした生きざまと面影は、私の心の中から決して消えることはありません。これからも私は、貴女に向かって問いかけていくことでしよう、これからもずっと。(阪南大学)

*

藤本陽子先生の歩み

馬場 広信

2012年5月1日午前1時25分、早稲田大学文学学術院教授、藤本陽子先生が52歳の若さで急逝なさった。先生は日本のカナダ文学研究の領域を広げる、プロジェクトに取り組んでおられた学者の一人である。先生を失ったことは、日本の英語圏文学・文化研究、およびカナダ地域研究において、他をもって埋めがたい空白が生じたことを意味する。

そのプロジェクトを、私の理解する限りで要約すれば、1980年代英語圏カナダ文学・文化研究について議論する基盤作りとなる。

藤本陽子先生は、1982年カナダ自主憲法制

定後間、エスニック・マイノリティのテキスト生産が盛んに行われていた1980年代にトロント大学へ留学され、修士号を取得しておられる。それ以降も他国ではあまり顧みられない、カナダの文学・文化状況を、政治・経済の変化と結びつけ論じることが、先生の目標であったと推察される。

翻るに1980年代の日本ではマーガレット・アトウッドの*Survival: A Thematic Guide to Canadian Literature* (1972)の翻訳すら出ていなかった(1995年に加藤裕佳子訳で、お茶の水書房より邦訳刊行)。ケベック研究の分野でも、「静かな革命」には産業社会の発展による、経済的結果の平等を目指すものであることを踏まえた研究はまだ主流ではなかったのではないのか。

いわんや文学研究においては、“Canadian postmodernism”という用語が、ヨーロッパ諸国や合衆国における哲学・文学理論のタームにとどまらず、イギリスの植民地時代に生産された神話を読み替え、多文化主義に向けた異議申し立ての政治的意味を強く持っていることは、今でも日本のカナダ文学研究者の間で共有されているかは疑問である。

“Canadian postmodernism”を文学理論として確立した、リンダ・ハッチョンの研究書 *The Canadian Postmodern: A Study of Contemporary English-Canadian Fiction* (1998) は今も邦訳が存在しない。ハッチョンが論じている小説が、ほとんど邦訳が刊行されていない状況では、“Canadian postmodernism”の社会性を論じることが不可能だからである。

1998年から刊行が続いている、彩流社の「カナダの文学」シリーズには藤本先生の翻訳による *Running in the Family* (1982, 邦題『家族を駆け抜けて』, 1996年刊行) が収められている。藤本先生は「カナダの文学」シリーズの収録作品選定にも積極的に関わっておられ、近刊のカナダ英語短編集では、すべての翻訳原稿に目を通し、実質的に監修者の役割を担っておられた。

このシリーズは先生にとって、日本で英語圏カナダ文学研究の素地を作ろうという、の取り組みの一部であったとも考えられる。その成果の例として、ティモシー・フィンドリーの *The Wars* (1978, 邦訳『戦争』は宮澤淳一訳で2002年に刊行) に見られるフランダース・デイの脱神話化の試みについて、ようやく議論をする素地が整いつつあったのだ。

藤本陽子先生は急逝なさる直前まで、英語圏

カナダ短編小説集の翻訳に目を通しておられた。この書籍に付されるはずであった作品解説は、藤本先生が“Canadian postmodernism”を日本語で論じる、初の包括的試みとなった可能性がある。こうした基盤作りの意識は学術論文にも見て取れる。「マーガレット・アトウッドの「サバイバル」神話——二十年後の風景——」（早稲田大学英文学会『英文学』第74号、1997年）は、カナダ文学史を、アトウッドの著書を基準にマッピングする危険を説いたものとして、今も再読される価値ある論文である。

英語で書かれた論文の中では“Art and Other Worlds?: Representations of Knowledge in Michael Ondaatje’s *Anil’s Ghost*”（日本カナダ学会『カナダ研究年報』第26号、2006年）で、登場人物の職業分析を通じ西洋文明の教育による、思索体系の植民化を読み解こうとした論文が刺激的であった。

この『アニルの亡霊』論は、博士学位申請論文の一部として書かれていたようである。会員諸氏は驚かれるかもしれないが、2003年から藤本先生はイギリスのバーミンガム大学、the Department of American & Canadian Studiesで博士号を取得するプロジェクトを進めておられた。

Danielle Fullerを主査として“Canadian Postcolonial Transformations”と題した論文は、オンダーチェ、シャニ・ムートゥー、シャハム・セルヴァドゥライの作品を取り上げ、植民者による教育が、南アジアからカナダにやってきたディアスポラの作家にどのように影響しているかを論じるものであったという。こう見ると日本語による口頭発表「シャニ・ムートゥーの小説における不在としてのカナダ」（2009年6月20日、拓殖大学文京キャンパス、第27回日本カナダ文学学会年次研究大会）も博士論文執筆の中間報告的な発表であったと推察される。

ゼミで藤本先生に接していた卒業生としては、先生は博士号取得に執着しておられると感じた。想像を逞くすることが許されるなら、藤本先生は今もカナダの宗主国であるイギリスで博士号を取得することで、カナダの独自性を世界に、そして日本に訴える発言権を得ようとする意志があったのかもしれない。

日本のアカデミズムは、藤本陽子を失った。カナダを「壮大なシステムの実験」と表した文学研究者を失った。しかし、藤本先生は生き続ける。来年春にWilfrid Laurier University Pressから刊行予定の研究

論集（監修スマロ・カンブレリ、ロバート・ザカリアス）には、藤本先生が日本における英語圏カナダ文学の受容史を記した論文が収録される予定である。私たちはまだまだ、藤本陽子先生に学ぶ必要があり、学ぶ機会を持っているのである。（早稲田大学助手）

* * *

＜リレー連載＞ 私のカナダ講座（第6回） 鹿兒島大学法文学部

細川 道久

私が担当するカナダに関する学部授業は、「西洋の歴史と社会A」、「西洋の歴史と社会演習A」、「異文化理解」の3つである（いずれも選択科目15コマ2単位）。いささか内容が分かりにくい名称だが、これは、昨年度のカリキュラム改革で授業科目名が変更されたためである。ちなみに、旧授業科目名は、それぞれ「大西洋関係史」、「現代史演習」、「国際文化論」であった。

「西洋の歴史と社会A」の主な対象は、法文学部人文学科2～4年生で、例年30～50名が受講している。テキスト・参考書は、拙著『カナダの歴史がわかる25話』（明石書店、2007年）と日本カナダ学会編『新版 史料が語るカナダ』（有斐閣、2008年）である。第1～2週のイントロダクションでは、カナダに関する知識やイメージを学生から聴きだしつつ、地図や統計を用いてカナダの民族的・地域的多様性を紹介したり、アメリカ合衆国とは似て非なるカナダの姿を示したりして、カナダへの関心を引き出そうと努めている。第3週は、カナダの歴史の大まかな流れを示し、カナダの歩みがグローバルな歴史といかに密接に絡み合っていたかを伝え、カナダ史を学ぶことが歴史研究全般において意義を持っている点を力説する。第4週以降は、多様な先住民社会、タラ漁と毛皮交易、フランス植民地と英仏抗争、アメリカ独立戦争と1812年戦争、連邦結成、連邦結成後の自立の歩み、南アフリカ戦争、第1次大戦、第2次大戦へのカナダの関与と当時のカナダ情勢、戦後世界秩序におけるカナダの役割、カナダの多民族化の諸相など、ほぼ時系列的に扱っている。毎週、歴史地図や諷刺画・写真を見せたり、National Film Board制作の歴史教材（例えば、アメリカ革命とロイヤリスト）を見せたりしているが、一番の工夫は、カ

ナダの歴史を他の国・地域の歴史と結びつけて学ばせようとしているところだろうか。本授業は複数年度の受講が可能だが、受講者の圧倒的多数は、初めてカナダ史に触れる者である。ただ、カナダ史は知らなくても、フランス、イギリス、アメリカ合衆国など大国の歴史についてはある程度知識は持っているし、それに関する邦語の概説書には事欠かない。したがって、授業全体を通じて、フランス史、イギリス史、アメリカ合衆国史などに関する知識を総動員させ、そうした大国の歴史とカナダの歴史がどのように結びついているか——フランス植民地期やイギリス植民地期はもとより、それ以降、イギリスからどのように自立をとげたのか、アメリカ合衆国の外圧に対していかに対応したのか、など——に関心を持たせるようにしている。つまり、カナダ史の個々の事項を理解する以上に、カナダが他の国・地域、さらには世界全体の動きとリンクしつつ歩んできたという「カナダ史のグローバル性」の理解に力点を置いている。

「西洋の歴史と社会演習A」も2～4年生対象だが、受講者の大多数が、西洋史関係のテーマでの卒業論文執筆希望学生（10～20名）である。本授業は演習であり、カナダ史の英語テキストを輪読している。第1～3週は、背景知識を理解させるため、テキストで扱う時代のカナダの歴史（あるいは、それに関連するイギリス、フランス、アメリカ合衆国の歴史も）について日本語文献を使って報告させ、第4週以降は、英語テキスト読解に入る。必要に応じて、内容に関連する事項を日本語文献で調べてきてもらうこともある。半年で内容が完結し、しかも受講者の英語レベルに合致するような英語テキストを選ぶことは難しく、時には書物の1章や論文1編で相当の時間を費やしてしまうこともある。ちなみに昨年度後期は、Bang Seng Hoe, *Enduring Hardship* (Ottawa, 2003) を使用したが、中国人移民に関する写真や諷刺画に加え、近年流行のオーラル・ヒストリー研究の成果が盛り込まれており、受講者には概ね好評だった。継続受講者も多く、扱うテーマがマンネリ化しないよう、政治・外交史、移民史、社会史など、毎学期異なるジャンルからテキストを選んでいく。

(11 頁に続く)

* * *

基調講演者 イタリアのカナダ研究者・ルカ・コディニョーラ教授のこと

竹中 豊

ヨーロッパのカナダ研究者の間で、「ルカ・コディニョーラ」(Luca Codignola)の名を知らぬ者はいないだろう。いや、それ以上にコディニョーラ教授は、カナダ研究を国際的なレベルで高めることに最も貢献した一人、としても過言でない。幸いにして、次期研究大会の基調講演者として、JACSはこのカナディアニストをお迎えすることになった。5月の役員会で決定した。カナダ人以外の基調講演者は、2000年の大会（於・大東文化大学）時のカナダ研究国際協議会 (ICCS) 会長・カレン・グールド教授（アメリカ）以来である。しかもヨーロッパからは初めてだ。カナダ研究の国際化を改めて実感する好機となろう。

ルカ・コディニョーラ教授はイタリア北部ジェノアの出身で、1947年生まれ。専門はカナダ史。現在、ジェノア大学の北アメリカ史教授、イタリア・ナショナル・リサーチ・カウンシル・地中海ヨーロッパ史研究所所長、およびセント・メアリーズ大学（ノヴァ・スコシア州）特任教授でもある。言葉はイタリア語以外に、英語とフランス語を完璧に使いこなす。ローマの大学、トロント大学、セント・メアリーズ大学で歴史学を修める。とくにトロント大学では、フランス植民地時代の研究者として著名だったWilliam J. Eccles教授のもとで研究に励み、同教授を今でも恩師と仰ぐ。

主要関心分野は、ヌーヴェル・フランス史、北大西洋地域におけるカトリック教会史、および大航海時代を含む地中海史で、著書・論文は実に多岐にわたる。最近の代表作としては、イタリア語の *Storia del Canada* (1999, 『カナダ史』) や *Colombo et altri navigator* (2007, 『コロンブスと航海者たち』)、*Humans in Outer Space: Interdisciplinary Odyseys* (2009, 共著)、*Le Saint-Siège: Le Canada et le Québec* (2011, 共著)、*Historians and Their Sources: Early North America, the Catholic Church, and European Expansion* (2011, 共著) などがある。

個人的研究のみでない。コディニョーラ教授は、学会活動にも精力的に取り組んできた。ICCS会長(1985-87)、イタリア・カナダ学会会長(1988-90)、北アメリカ史イタリア委員会会長(1989-91)、アカディア研究国際学会会長(2004-現在)の要職を勤め、研究者としてのみならず、その人柄や学問的指導力も高く評価されている。ICCS会長退任後も、各種のICCS活動に長らくかかわってきた。同時に、イタリアのみならず、カナダ(ラヴァル大学、トロント大学)、アメリカ(ミネソタ大学、ブラウン大学)、イギリス(ロンドン大学)など、国際的舞台上で多くの学生にカナダ史を講じてきている。

このたびの**基調講演**において、JACSの学際的な性格上、あまりにも歴史学の専門性に特化したテーマでお話していただく予定はない。そうではなく、カナダ史をめぐる豊富な研究および教授体験を踏まえながらも、広くカナダ研究者の興味をそそるテーマを選んでいただいた。題して、“**Canada for Canadianists: A Long-Term View of a Very Special Country**”。会員諸氏にとって、知的想像力をかき立てる内容になることを期待している。

最後に、個人的な話で恐縮だが、コディニョーラ氏と私とのつきあいは、もう30年以上にもなる。1979年の9月、私はワシントンでのアメリカ・カナダ学会(ACSUS)大会にJACS代表として出席させていただき、そこでの出会いが最初だった。当時の私は、ヌーヴェル・フランス史研究からカナダ研究に踏み込んでいた頃で、関心分野のみならず、上述したEccles教授が共通のmentorという偶然の巡り合わせも幸いした。以来、彼の家族もふくめてのおつきあいが始まる。カナダではしばしばお互いに意見交換の機会を多く持てたが、一度ローマでもお会いできたのは奇遇か。ちなみに、彼の妹さんはオペラの演出家ロレンツァ・コディニョーラで、日本の音楽大学での特別招聘教授として何度も来日されている。でも、コディニョーラ教授自身は、今回が初来日だ。Benvenuto a Giappone!(ようこそ日本へ!) (カリタス女子短期大学)

* * *

(((事務局 より)))

◆「トラベル・グラント」募集について

2011年度第2回のトラベル・グラント募集をお知らせします。締め切りは8月末日です。[以下募集要項]カナダおよびカナダ以外の国(日本を除く)で開催される国際会議などでカナダ研究について報告をする本学会会員へ旅費補助受給者(以下トラベル・グラント)を募集します。本学会会員によるカナダ研究の成果を広く海外に発信し、研究の交流や国際化を図るのが目的です。ただし、トラベル・グラントは旅費の一部を補助するのが趣旨ですので、旅費のすべてをカバーするものではありません。募集要項は次のとおりです。(1)支給金額と支給人数：1名につき5万円・最大4名。(2)支給対象者：応募時点において日本カナダ学会会員であること。専任の勤務先を持たない方(原則として)。専任の勤務先を持つ会員でも応募出来ますが、優先度は低くなります。(3)応募締切日：毎年4月末日、8月末日、11月末日(年3回)。また、1月末日以降の応募に関しては、役員会内の対外交流・共同研究委員会にて協議し、仮承認のかたちでグラントを執行いたしますが、5月の役員会にて最終承認されない場合は、グラントの返金もあることをご了承下さい。(4)応募書類：①本学会所定の応募用紙(日本カナダ学会のホームページに掲載)、②国際会議などでの報告が正式に受け入れられたという文書(メールも可)、③出張に関する費用(航空運賃、滞在費、参加登録料など)の見積書。(5)審査方法：日本カナダ学会役員会における審査機関(対外交流・共同研究委員会)により事前審査を行い、それぞれ5月、9月、1月の役員会にて最終決定します。(6)出張後の義務：①帰国後2週間以内に報告した論文を学会事務局まで提出すること(郵送にて)。②出張に関わる費用の報告書(学会ホームページ掲載の所定の書式)。(7)その他の事項：①当該年度内でトラベル・グラントの予算額(20万円)が満額執行されなかった場合(たとえば、定数4名に満たず3~1名の派遣の場合)、残金については次年度のみ繰越金として処理します。②出張期間は当該年度内に終了しなければなりません。③このグラントを支給された会員は、その後3年間再度応募することはできません。④書類送付先・問い合わせ先：〒564-8511 大阪府吹田市岸部南2-36-1 大阪学院大学流通科学部杉本公彦研究室 日本カナダ学会事務局。

*

第36回年次研究大会に向けて

2011年3月11日に語る言葉もない想定外の大地震、大津波、原発事故に一度に見舞われた東日本。想定に問題は無かったのか疑問は残り、国家非常事態にすべての仕組みを変えることが模索されます。亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。また被害を受けられた大変多くの方、ならびにご家族の皆様にも哀心よりお見舞い申し上げます。阪神大震災で被災した西日本の私たちにとってもできることは何か。ボランティア活動、義援金募金活動、節電生活と一人でもできることから始めようと思っています。がんばろう！日本。

学会サイトで既に発表になっておりますが、**大会場所と日程が変更されております**。当初本年度年次大会は、文京学院大学（東京）にて、9月10日（土）～11日（日）に開催することになっておりましたが、東日本大震災の影響等を考慮して、学会本母校であります**大阪学院大学**にて**9月17日（土）～18日（日）**の日程で開催する旨、変更になっております。そのため当初大会実行委員長は藤田直晴前会長でしたが、開催地等の利便性を考慮して**杉本公彦**に変更し、副委員長として**杉本喜美子**会員（大阪学院大学経済学部准教授）がサポートに当たることとなります。大会企画委員会委員長については、**下村雄紀**会員に変更はありません。異例のことでもございますので、ご了解くださいますようお願い申し上げます。

5月の第1回役員会にて承認されました本年度大会の特徴は、各セッションの報告テーマのユニークさに加えて、本学会として初めてとなる日本オーストラリア学会との部分共催になることと、海外からの著名な研究者を多数お招きできたことにあります。例年以上の活気ある大会になればと存じます。

大会は「**多文化主義のゆくえ：加豪比較**」をテーマとして運営されます。大会プログラム概要としては、第1日目には、午前に**セッション1【自由論題】**3名の報告があり、午後に**ルカ・コディニョーラ氏（Dr. Luca Codignola / 元ICCS会長、元伊カナダ学会会長、ジェノア大学教授）**の基調講演、および駐日カナダ特命全権大使・**ジョナサン T. フリード氏**の大使講演があります。休憩をはさんで、**セッション2【文学と文化】**を行い、終了後に総会となっております。その後、場所を変えて第1日目の最後を飾るレセプションを開催いたします。

第2日目には、午前に**セッション3【分権のかたちー連邦制】**を皮切りに、**セッション4【アジア太平洋におけるカナダ研究】**では、招聘研究者による海外学会での活動についての報告が行われます。昼食後、**セッション5【移民政策 (Citizenship)】**を行い、シンポジウムでは大会テーマである**【多文化主義のゆくえ：加豪比較】**で、豪学会の招聘のパネリストである**プーコン・キー教授（Professor Pookong Kee / メルボルン大学）**に「アジア系コミュニティの観点から豪多文化主義の展開」でご報告いただき、日、加、豪によるパネル・ディスカッションが行われます。

基調講演者と豪学会以外の海外からの招聘者をご紹介しますと、**アンディ・レオン教授（Professor Andy Leung / 国立寶蘭大学、前・台湾カナダ学会会長）**と**スチュワート・ギル教授（Professor Stewarg Gill / クイーンズランド大学、前・豪ニューージーランドカナダ学会会長、PANCS初代会長、現ICCS執行役員）**です。今回はいつになく豪華なメンバーで開催されます。ご期待ください。

大会実行委員長 杉本公彦